生徒指導・教育相談

# 「不登校の理解」を基盤とした各学校におけるチーム支援の充実
## ― 効果的な支援につながるチーム会議を目指した「不登校対応パッケージ」の開発を通して ―


平成30年度　生徒指導・教育相談研究グループ
専門研究員　塩竈市立第二中学校　鈴木　孝臣
登米市立佐沼小学校　小川　裕輔
宮城県泉館山高等学校　西澤　崇
指導主事　相談支援班　齋藤　昭子
相談支援班　本郷　直哉



## 概　要

不登校の要因や背景は多様かつ複雑であるため，不登校児童生徒に対する支援は，不登校に対する理解を深めることや，教職員と保護者が方向性を一致させた上でチームとして行うことが重要である。しかし，実態調査からは，多くの学校でチームとしての支援が行われているにもかかわらず，不登校児童生徒への支援に難しさを感じている教職員が多いことが分かった。

これを踏まえ，本研究では，不登校に対する理解を深め共有した上で，効果的な支援につながるチーム会議の方法を学ぶための研修ツール「不登校対応パッケージ」を開発した。児童生徒の行動の背景や要因を推し量り，強みに目を向けるアセスメントやそれに基づいたプランニングを，チーム会議で可視化しながら行えるようにすることで，各学校における不登校児童生徒へのチーム支援の充実を目指す。



〈キーワード〉　チーム支援　チーム会議　不登校対応パッケージ
アセスメントとプランニング　不登校についての実態調査


## １　主題設定の理由

### １．１　国と県の現状から

「平成29年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（宮城県分）の結果について」（平成30年10月）によると，平成29年度に年間30日以上欠席した児童生徒のうち，病気，経済的理由等を除いた不登校児童生徒数は全国で193,674人，宮城県で4,827人であった。図１から，国公私立小・中学校，中等教育学校（前期課程）の不登校児童生徒数は増加傾向が続いていることや，高等学校で平成29年度に増加に転じたことが分かる。

一方，平成29年度の県の再登校率は，小学校が25.2%，中学校が29.4%，高等学校が35.8%であった。これらのことから，年度内に３割程度の児童生徒が再登校しているにもかかわらず，不登校出現率が高水準で推移していることが分かる。一部の不登校児童生徒が学校復帰しているにもかか

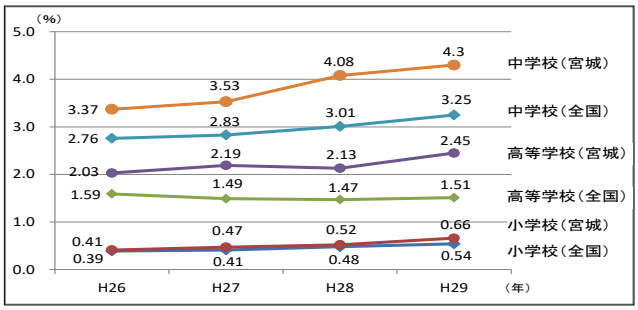



図１　小・中学校，高等学校の不登校児童生徒の出現率推移
出典　「平成 29 年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（宮城県分）の結果について」より作成）

わらず，不登校児童生徒数が単純に増え続けるように見える理由として，文部科学省の「生徒指導リーフ（Leaf.22）」（平成30年７月）では，「不登校を解消した生徒数」を「新たに不登校になる生徒数」が上回っているからであると説明している。

この生徒指導リーフの捉え方を踏まえ，現在不登校状態にある児童生徒の支援と共に，欠席30日に至る前の児童生徒への支援を更に充実させていく必要があると考える。

### １．２　不登校児童生徒に対する県内の支援の現状から

県が示した「平成28年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小・中学校）の結果について」（平成29年12月）の「早期発見・早期対応に係る取組【中学校】」（図２）からは，不登校出現率が低い学校は，高い学校に比べ「②複数の目による観察」「③予兆のサインの察知」「⑩欠席背景の意識化」「⑪電話対応・家庭訪問」の値が高いことが分かる。また「⑦養教・ＳＣ・ＳＳＷとの連携」「⑧管理職等への相談・報告」の値も高かった。この結果については小学校でも同様な傾向が見られた。

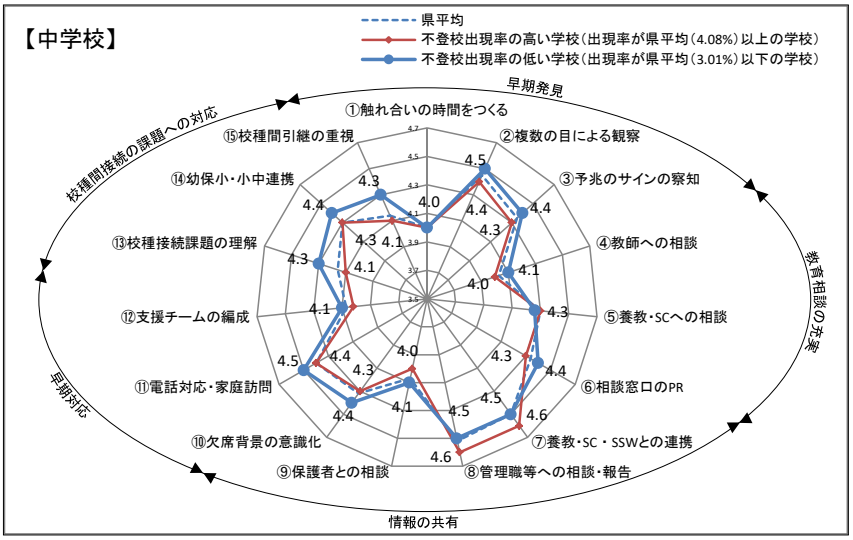



図２　早期発見・早期対応に係る取組
出典　「平成 28 年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小中学校）の結果について」より作成

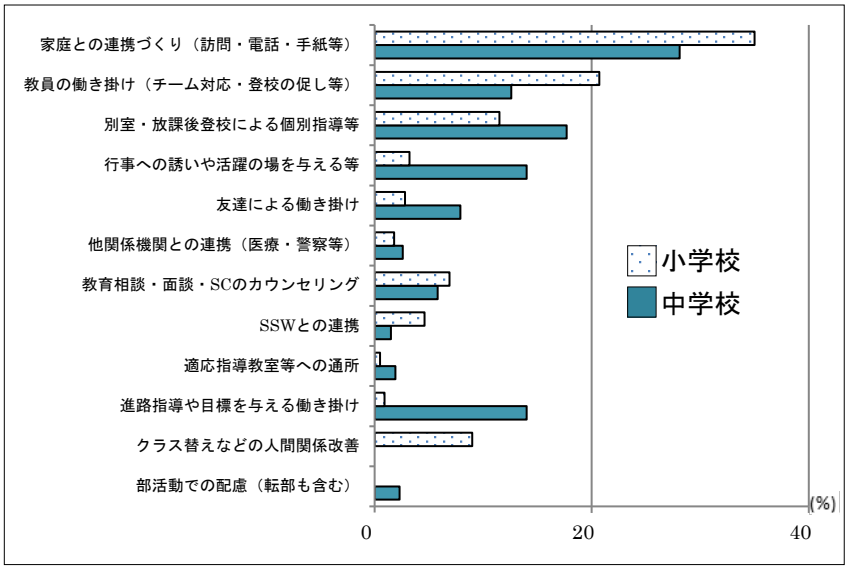



図３　改善が見られた児童生徒に有効だった働き掛けについて
出典　「平成 28 年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小中学校）の結果について」より作成

②⑦⑧の結果から，不登校児童生徒に対して教職員がチームとして支援することの効果が読み取れる。また，③⑩⑪の結果から不登校の支援では早期に発見し対応する，初期対応が重要であることが読み取れる。

「改善が見られた児童生徒に有効だった働き掛けについて」（図３）からは，不登校に対して教職員と家庭が連携して共通理解を図りながら支援することや教職員がチームとして組織的に働き掛けること，複数の教職員の理解と協力を得ながら，別室・放課後登校による個別指導を進めることなどの有効性が読み取れる。

### １．３　これまでの研究から

生徒指導・教育相談グループでは，平成28年度に「不登校の初期対応」について研究を行った。作成した「こころ満タンサポートガイド」は，不登校傾向がある児童生徒に対応する際に，基本的な考え方や対応の仕方を共通理解できる「満タンスタートガイド」と，教師が児童生徒の状態等を見取った上で心のエネルギーを満たすための対応を選択し活用できる「満タンナビ」で構成されている。

また，平成29年度は教職員が不登校に対する認識の仕方や支援の方法について考えたり，情報を共有したりすることができる研修ツール等を開発し「みやぎ不登校サポートパック」としてまとめた。

平成30年度の研究は，平成28年度，平成29年度の継続研究と位置付け，実態調査の結果を踏まえた上で，不登校対応のための研修ツールを開発した。チーム会議におけるアセスメント[1] とプランニング[2] ，チーム会議の方法などについて研修することで効果的な支援の実践につなげ，各学校におけるチーム支援の質を更に高めたいと考える。

## ２　主題・副題について

### ２．１　「不登校の理解」とは

平成29年度の研究では「不登校の理解」について「不登校経験が『人生の糧になり得る』という認識を教職員間で共有し，一人一人に寄り添った支援を講じること」が重要であると示している。同時に「不登校の理解」を教職員間だけでなく保護者と共有することの大切さも示している。

この考え方を基本とし，今年度は不登校に対する認識が直接的に支援につながるよう，教職員間で共有する考えとして，「不登校はどの児童生徒にも起こり得るもの」「不登校を問題行動と判断しない」を加える。その上で「不登校の理解」の定義を「不登校はどの児童生徒にも起こり得るものであり，その行為を問題行動と判断せず，児童生徒が将来的に『不登校経験が人生の糧になった』と思えるような関わり方をすること」とする。

「不登校はどの児童生徒にも起こり得るもの」という考えを教職員間で共有することで，全ての教職員が児童生徒の小さな様子の変化に注意を向けるようになり，不登校の兆候が見られた児童生徒に対しての初期対応が可能になると考える。

「不登校を問題行動と判断しない」という考えを教職員間で共通認識し，それを保護者と共有することで，教職員や保護者が責任を感じて自分を責めたり，責任を相手に求め，連携がうまくいかなくなったりすることを防ぐことができる。その結果，教職員と保護者が協力し合い，落ち着いて実行可能な支援を行えるものと考える。同時に不登校児童生徒が自分自身を責め，自己肯定感を下げてしまうことも防ぐことができると考える。

「児童生徒が将来的に『不登校経験が人生の糧になった』と思えるような関わり方をする」という考えを教職員間で共有することで，教職員が不登校児童生徒の将来に見通しを持ち，今後の成長に期待を持ちながら支援に当たることができるようになると考える。「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」（文部科学省，平成28年７月）では，不登校経験者379人へのインタビュー調査「平成18年度不登校実態調査」の結果として，「行けば良かったと後悔している」という自身の不登校に対して否定的な意見が39.4％あったとする一方で，肯定的な意見も32.6％あったと示している。その内容は「不登校を経験したおかげで今の自分がいる」「不登校を経験したことで出会いや友人の大切さを知った」などである。ＰＴＧ[3] （心的外傷後成長）に関する研究では，起きてしまった現実と向き合い，それを乗り越えようと努力することで，人間的な更なる成長につながる可能性が見いだせるという考え方が示されている。児童生徒が将来的に「不登校経験が人生の糧になった」と思えるような関わりを教職員や保護者が持つことは，不登校状態で苦しんでいる児童生徒への共感だけでなく，将来の姿に見通しを持つことにつながる。苦しさを乗り越えた後に待っているであろう精神的な成長を信じ，前向きな気持ちで支援を行うことは，児童生徒や保護者にも良い影響を与えるのではないかと考える。

この「不登校はどの児童生徒にも起こり得るもの」「不登校を問題行動と判断しない」「児童生徒が将来的に不登校経験を人生の糧となったと思えるような関わり方をする」という３点を踏まえ，一

1　「見立て」とも言われ，解決すべき問題や課題のある事例（事象）の家族や地域，関係者などの情報から，なぜそのような状態に至ったのか，児童生徒の示す行動の背景や要因を，情報を収集して系統的に分析し，明らかにしようとするもの。（文部科学省生徒指導提要 第５章より抜粋）

2　手立て。ケースに応じた目標と計画を立てること。（文部科学省 生徒指導提要 第５章より抜粋）

3　アメリカの臨床心理学者，リチャード・テデスキとローレンス・カルフーンはＰＴＧを「危機的な出来事や困難な経験との精神的なもがき・闘いの結果生ずる，ポジティブな心理的変容の体験」と定義している。

人一人に寄り添った支援を行うことで，不登校児童生徒は自分が大切にされていることを実感し，少しずつ自己肯定感を高め，やがて心境や行動の望ましい変容につながるものと考える。

### ２．２　「チーム支援の充実」とは

文献研究や実態調査の分析を踏まえ，本研究では「チーム支援の充実」を以下の３点と捉える。

１点目は「不登校児童生徒を担任が一人で支援するのではなく，教職員が『不登校の理解』を共有し，支援の方向性を一致させた上で，保護者と連携しながら複数で支援を行える状態を構築できていること」である。

２点目は「チーム会議の場で，本人の行動の背景や要因を推し量り，強みに目を向けたアセスメントやそれに基づいたプランニングを行い，不登校児童生徒の望ましい変容につながるような支援を実践できること」である。

３点目は「チーム会議を，早期に，かつ継続的に行うことで，刻々と変わる不登校児童生徒の心の状態に合わせた効果的な支援を継続して行えること」である。

このように，教職員が不登校に対する共通理解を基盤としてチーム会議を行い，効果的な支援を継続的に行えるようになることを「チーム支援の充実」と捉える。

### ２．３　「『不登校対応パッケージ』の開発」とは

１．２で示したとおり，不登校において効果的な支援を行うためには，学校全体がチームとして保護者と連携しながら早期に対応することが重要である。それを踏まえ，本研究では２．２で示した３点について学ぶための研修ツールとして「不登校対応パッケージ」を開発し，各学校における不登校児童生徒へのチーム支援の充実を図りたいと考える。

## ３　研究の目標

「不登校の理解」を共有し，チーム会議において効果的な支援策を生み出すためのアセスメントとプランニングの考え方や，実践方法などを身に付けるための研修ツールである「不登校対応パッケージ」を開発する。その活用を提言することで，各学校で不登校に対するチーム支援が充実していくことを目指す。

## ４　研究の内容と方法

本研究では不登校の児童生徒に加え不登校相当や準不登校，不登校傾向，「連続欠席３日（累積欠席６日）」の児童生徒[4] 及び不登校の兆候が見られる児童生徒を研究の対象とする。

(1) 国や県の不登校の実態や対応に関する資料を調査・分析し，研究の方向性を検討する。
(2) 県内の教職員を対象に，不登校に対する認識や支援に関する実態調査を行い，教職員の不登校に関する悩みや支援の現状を分析する。また，見逃しやすい兆候や逆効果だった支援策などについても分析する。
(3) 文献や資料等を基に,効果的な支援策を生み出すために必要な支援の在り方を探る。
(4) (2)(3)の調査･分析を基に，「不登校対応パッケージ」を開発する。
(5) 「不登校対応パッケージ」を活用した校内研修を行い，効果を分析し，内容の改善を図る。
(6) 研究のまとめを行い，今後の課題を探る。
(7) 開発した「不登校対応パッケージ」を宮城県総合教育センターＷｅｂサイトで発信する。

4　不登校（累積欠席30日以上），不登校傾向（累積欠席７日/月），不登校相当（欠席日数＋保健室等登校日数＋（遅刻・早退日数÷２）＝30日以上），準不登校（欠席日数＋保健室等登校日数＋（遅刻・早退日数÷２）＝15日以上30日未満）（宮城県教育委員会発行の「登校支援個票」参照）

5　研究構想図

## 研究主題

**「不登校の理解」を基盤とした各学校におけるチーム支援の充実**
～効果的な支援につながるチーム会議を目指した「不登校対応パッケージ」の開発を通して～

## 国・県の現状

不登校児童生徒数
高水準で推移

平成28年度宮城県長期
欠席状況調査の分析

有効な支援は…
・学校全体がチームとして支援
・保護者との連携　・初期対応

## これまでの研究

H28　初期対応 → 「こころ満タンサポートガイド」 開発

H29　初期対応・自立支援 → 「みやぎ不登校サポートパック」 開発

## 研究目標

「不登校の理解」を共有し，チーム会議において効果的な支援策を生み出すためのアセスメントとプランニングの考え方や，実践方法などを身に付けるための研修ツールである「不登校対応パッケージ」を開発する。その活用を提言することで，各学校で不登校に対するチーム支援が充実していくことを目指す。

## 調査分析

**・不登校に関する実態調査**
**・不登校に関する文献研究**
（初期対応　チーム支援
チーム会議　等）

・多くの学校でチームは組織されていて有効感を感じている
・一方で，多くの教職員が不登校の支援に行き詰まりを感じている

・実態調査の分析から，現在行われているチーム会議は，情報の共有が中心なのではないかと考えられる

・「不登校の理解」を実際の支援に結び付ける手立ての必要性
・チーム会議における「アセスメントとプランニング」の内容について見直す必要性

## 「不登校対応パッケージ」の開発

**Webサイト上で発信**

教職員の不登校に対する認識の共有やチーム会議の方法，不登校対応のヒント集などをまとめた研修ツール。
特に**チーム会議**での**アセスメントとプランニング**を重視。情報を広く収集できるよう，H28版・H29版とリンク。

### （A）研修用パッケージ

・不登校に対する理解を深め，それを共有した上で，初期対応のポイントや保護者との連携の仕方，ホワイトボードなどを用いて可視化するチーム会議の方法やその中で行うアセスメントとプランニングの考え方などを学ぶ。

A-1　不登校に対する認識の共有（「不登校の理解」）

A-2　初期対応

A-3　保護者との連携

A-4　アセスメントとプランニング

A-5　ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法

### （B）対応ヒント集

B-1　チーム会議継続モデル
・アセスメントとプランニングを見直しながら，会議を継続することで，支援にどのような効果をもたらすのかを学ぶ。

B-2　効果的な支援のヒント
・不登校児童生徒に対する効果的な支援のヒントを得る。

### （C）不登校対策委員会だより

・支援の方向性を共通理解するために，不登校対策担当者等が発行する職員会議資料。注意すべき時期や不登校児童生徒の状況に応じた支援例等を確認できる。※小中高版（No.1～5）

## 各学校における「不登校対応パッケージ」の活用

## 各学校におけるチーム支援の充実

## ６　研究の実際

### ６．１　実態調査の概要

#### ６．１．１　目的

県内の教職員に対し，現在の不登校に対する認識や支援に関する調査を行い，不登校に関する悩みや支援の実態を把握した。そして，そこから明らかになった傾向や課題などを分析し，開発する研修ツールの内容に反映させた。

#### ６．１．２　対象及び実施日

今年度の専門研究員所属校の教職員と，総合教育センターの研修に参加した教職員を対象とした。

(1) 研究員所属校の教職員（塩竈市立第二中学校，登米市立佐沼小学校，宮城県泉館山高等学校）
(2) 平成30年６月18日（月）　生徒指導スキルアップ研修会受講者
(3) 平成30年６月28日（木）　カウンセリング技術研修会（基礎コース）受講者
(4) 平成30年６月29日（金）　不登校支援研修会受講者
(5) 平成30年７月12日（木）　生徒指導コーディネーター研修会受講者
(6) 平成30年７月13日（金）　保健教育研修会受講者

なお，回答者の校種別内訳は以下の通りである。（総計529名）

| 校　種 | 人数(人) | 校　種 | 人数(人) |
|---|---|---|---|
| 小学校 | 197 | 特別支援学校 | 24 |
| 中学校 | 170 | その他（中等教育学校，農業大学校） | 6 |
| 高等学校 | 132 | | |

#### ６．１．３　調査方法及び回答方法

調査方法は質問紙法によるアンケート調査で，回答方法は選択回答（一部自由記述）とした。

#### ６．１．４　調査内容について

研究の方向性を探るため，現場の教職員の不登校に対する認識や，不登校児童生徒に対する支援の方法などについて調査を行った。

### ６．２　調査結果と考察

#### ６．２．１　「不登校対応における校内組織（チーム）の編成について」の結果から

「チームの編成について」（図４）では，全体の73.0％の教職員が，不登校対応のためのチーム編成は「されている」と回答した。校種別に見ると，小学校，中学校でのチーム編成の割合は80％以上と高かった。一方，高等学校は53.0％，特別支援学校は37.5％と，小･中学校に比べ低い割合だった。「チーム支援の有効感について」（図５）では，チームが編成されていると回答した教職員のうちチーム支援に有効感を感じている割合は，87.3％と高かった。

「会議の実施状況について」（図６）では全体の87.1％の教職員が，会議は「行われている・行える状態になっている」と回答していた。

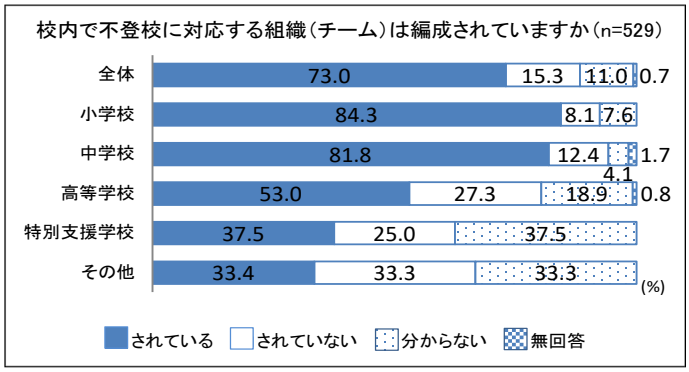



図４　チームの編成ついて

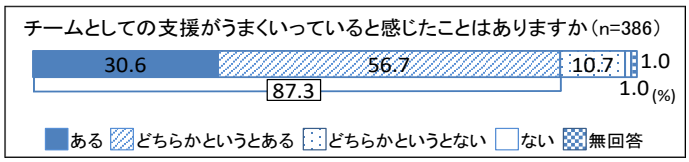



図５　チーム支援の有効感ついて

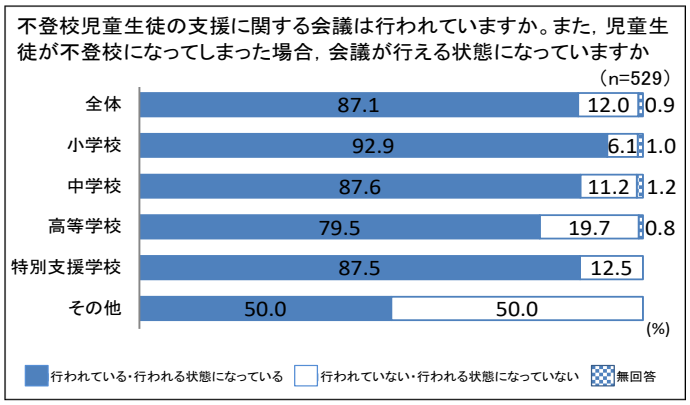



図６　会議の実施状況について

校種別に見ると，その他を除く校種では，80％もしくはそれ以上の割合で「行われている・行える状態になっている」と回答しており，特に小学校ではその割合が90％を超えていた。

「連携して行った有効な支援策について」（図７）では，担任以外の教職員の声掛けや周囲の先生との話合いが上位を占めている。チーム編成の状況や会議の実施状況と関連して考えてみても複数で不登校対応を行っており，それが効果的であると感じていることが分かる。

また，「チーム支援の有効感と担任の悩みに関するクロス集計」（図８）では，チーム支援の有効感があると回答した教職員は，担任が一人で悩んでいると感じる割合が低く，チーム支援の有効感が低くなるにつれて，担任が一人で悩んでいると感じる割合は高くなっている。

このことから，チーム支援が充実することで担任が一人で悩んだり行き詰まったりすることが少なくなるのではないかと考えた。

一方で，「不登校対応についての担任の悩み」（図９）では，担任が一人で悩んでいることがあると回答した割合が，48.2％であった。また，図８からは，チーム支援の有効感があると回答した教職員の中でも担任が一人で悩んでいることがあると回答した教職員が34.7％いることが分かった。

このことは，校内でチーム支援が行われていても，不登校児童生徒や保護者と直接的に接することの多い担任は，一人で悩む状況が多いことを表している。このことから，一人で悩みがちな担任を，それ以外の教職員で支えることができれば，担任は安心感を持って児童生徒や保護者と接することができるようになり，それが児童生徒や保護者にも良い影響を与えるものと考える。

### ６．２．２　不登校対応の際の行き詰まりについて

「不登校対応への行き詰まりと難しさについて」（図10）では，不登校対応に行き詰まりを感じている教職員の割合は79.8％と高かった。また，不登校対応が難しいと感じている教職員の割合は87.3％と更に高かった。

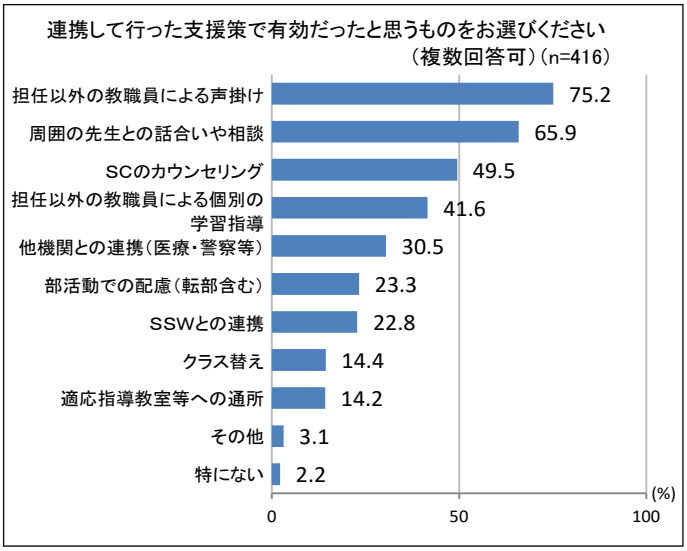



図７　連携して行った有効な支援策について

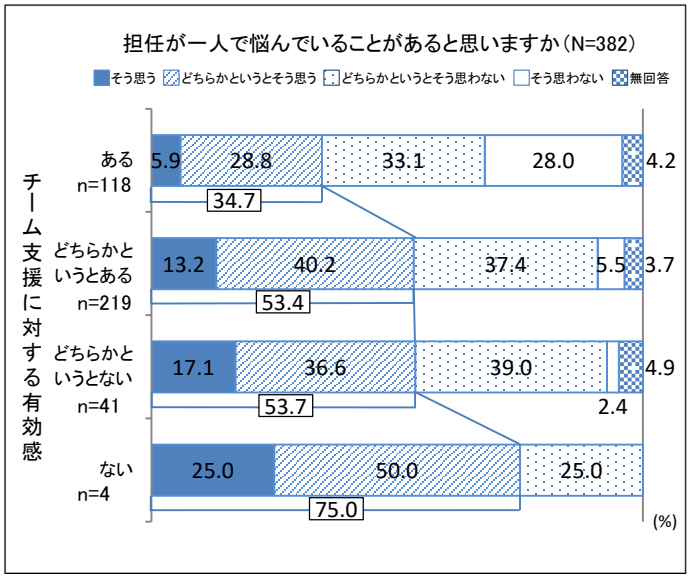



図８　チーム支援の有効感と担任の悩みに関するクロス集計（無回答を除く）

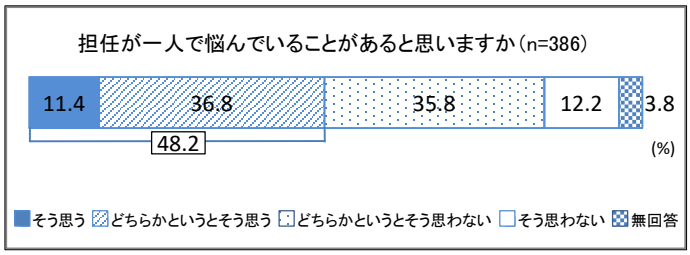



図９　不登校対応についての担任の悩み

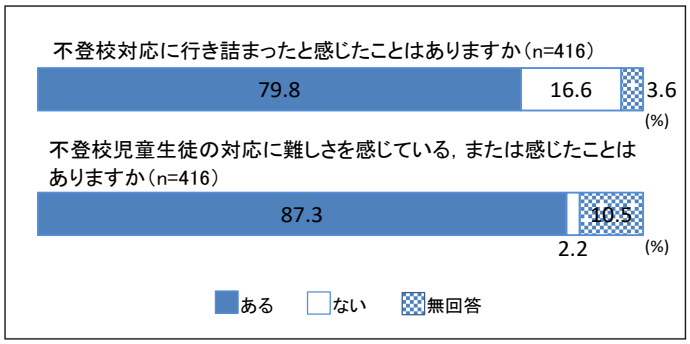



図10　不登校対応への行き詰まりと難しさについて

この結果から，不登校対応のためのチームが多くの学校で編成され，チーム支援の有効感を多くの教職員が感じているにもかかわらず，80％以上の教職員が不登校対応に悩んでいることが分かった。

自由記述を見ると，行き詰まりの要因として家庭との連携についての内容や，次の支援策が見付からず，打つ手がないと感じているという内容，支援を継続しても児童生徒の変容につながらないことなど，手詰まりを感じるという内容が多く見られた。また，チームとしての協力が得られない，支援に関わる者それぞれが自分なりの思いや方法で児童生徒と接するなど，支援の方向性が一致していなかったという内容や，欠席の長期化に関わる内容，児童生徒の特性についての内容も見られた。さらに，高等学校の教職員の特徴として，各学校で規定された欠席日数や欠課時数を超過する時期が近づくにつれて，行き詰まりが強く感じられるようになるということが分かった。

### ６．２．３　不登校対応の行き詰まりの解消に向けて

不登校対応への行き詰まりの要因を更に深く掘り下げるため，いくつかの調査結果に注目した。

(1) チーム会議について

「不登校児童生徒への支援として行っていること」（図11）を見ると「不登校児童生徒に関する情報の共有」「不登校そのものや不登校児童生徒に対する認識を教職員間で一致させること」については比較的多くの教職員が，行っていると回答した。一方，それ以外の内容については，行っているという回答の割合が40％以下であった。そこで，このように実行率が低かった支援の項目について以下のように分析した。

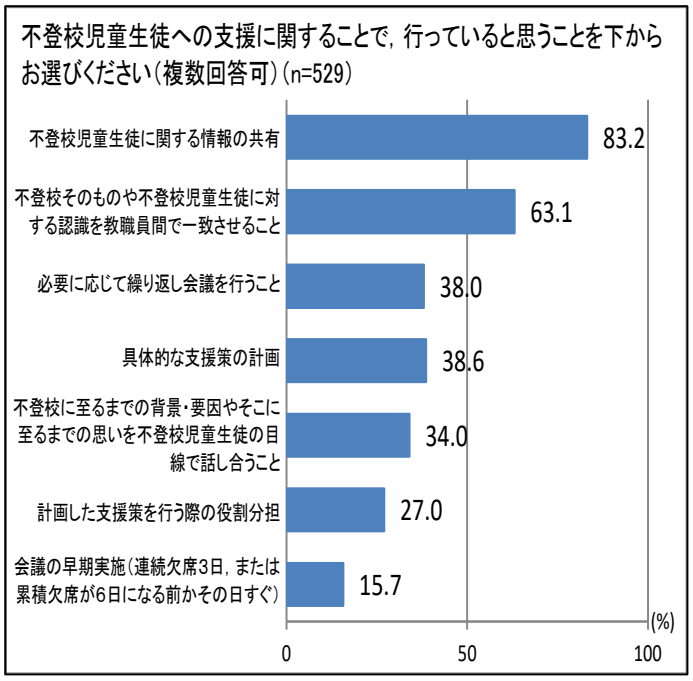



図11　不登校児童生徒の支援として行っていること

① チーム会議の早期実施について

「会議の早期実施（連続欠席３日，または累積欠席が６日になる前かその日すぐ）」について，行われていると回答した割合は15.7％と低かった。この結果から，不登校の兆候が現れていても，すぐにチームでの対応が行われていないことが考えられる。そのため，チーム会議を早期にタイミングよく実施できる体制を学校として構築できるような手立てが必要だと考える。

② アセスメントとプランニングについて

「不登校に至るまでの背景・要因やそこに至るまでの思いを不登校児童生徒の目線で話し合うこと」「具体的な支援策の計画」「計画した支援策を行う際の役割分担」について，行われているという回答の割合は低かった。これは６．２．２で行き詰まりの要因として挙げられた「次の支援策が見付からず打つ手がないと感じている」「支援を継続しても児童生徒の変容につながらない」という部分などから，アセスメントで児童生徒の行動の背景・要因をどのように見立てればよいかが明確になっていないことや，アセスメントの結果をプランニングに生かすことができていないためではないかと考えられる。

不登校児童生徒一人一人に寄り添った支援を行うためには，児童生徒の行動の背景や要因を推し量り，強みに目を向けるアセスメントが重要である。アセスメントによって，プランニングの方向性や実際に行われる支援の内容も変わるため，教職員がアセスメントの意義や重要性を理解した上でチーム会議に臨む必要があると考える。

そして，このアセスメントを基に，具体的なプランニングが行われていることも重要である。プランニングが，具体的で実行可能なものでなければ，その後の支援には結び付かない。そのため，アセスメントの内容と強みをプランニングに生かすだけでなく，いつ，誰が，どこでその支

援を実行するのかを明確にするための手立てがあれば，不登校児童生徒それぞれに適した対応を行えるようになるのではないかと考える。

③　チーム会議の継続性について

「必要に応じて繰り返し会議を行うこと」の回答割合が38.0％と低いことから，現在行われているチーム会議では，支援の方法を継続的に話し合うまでには至っていないことが考えられる。

アセスメントとプランニングに確かな答えは存在しない。だからこそ，チーム会議で確実にアセスメントとプランニングを行い，その支援策の有効性を振り返り，時にはそれまでと違った視点を持ちながら継続的に支援していくことが重要である。

また，児童生徒や保護者の心の状態は刻一刻と変容していくものであり，それに合わせて必要な支援も日々変化しているはずである。その時々の児童生徒の心情や心のエネルギー[5] の状態に合わせて柔軟に見方を変えながらアセスメントやプランニングを行うことも重要である。

これらを踏まえ，継続的なチーム会議の実践が，不登校児童生徒や保護者の気持ちに寄り添った支援につながるのではないかと考えた。

(2)　不登校に対する認識の共有について

国や県が示している不登校に対する資料の分析や文献研究などから，１．２で示したように，不登校対応では不登校に対して教職員と保護者が共通理解を図り，連携して支援することや教職員がチームとして組織的に働き掛けることが効果的であることが分かる。しかし，実態調査の自由記述からは，６．２．２で示したように，チームとしての協力が得られないという内容や支援に関わる者それぞれが自分なりの思いや方法で児童生徒と接するなど，不登校に対する認識や支援の方向性が一致していない場合があることが読み取れた。これは，不登校に対してどのような認識を持ち，どのような方向性で支援を行えばよいかなどについて考える機会があまりなく，それを共有する場の設定もなされていないためではないかと考えた。教職員の間で不登校に対する認識や支援の方向性が一致できていない場合，支援に難しさを感じるばかりでなく，支援が実行されなかったり，逆効果になったりする恐れもある。そこで，不登校に対する認識について具体的に示すことや，それを基盤として支援の方向性を一致させるための場を設定し，それを直接的に支援に結び付けるための手立てが必要だと考えた。

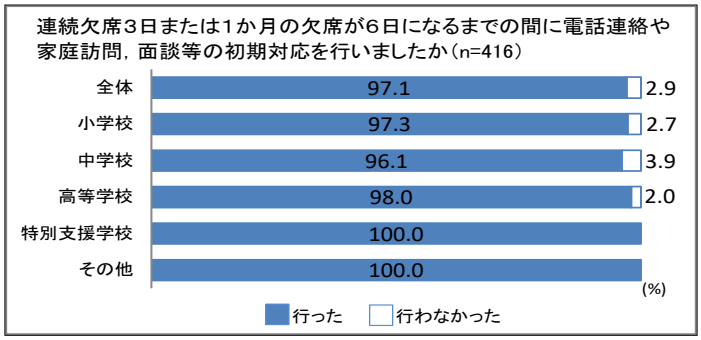



図12　初期対応の実施について

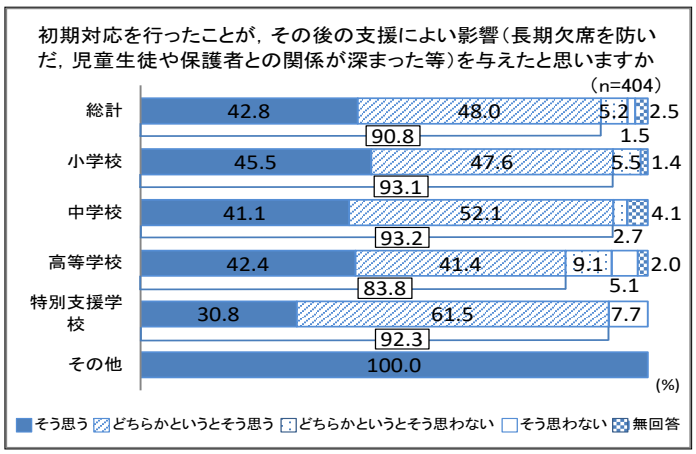



図13　初期対応の有効感について

(3)　初期対応について

「初期対応の実施について」（図12）では，校種に関係なくほとんどの教職員が初期対応を行っていると回答している。「初期対応の有効感について」（図13）では，初期対応を行った教職員の90.8％が初期対応の効果を実感していることから初期対応がその後の支援に良い影響を及ぼしていることが分かる。

5　「家庭や学校で安心して過ごせる，自分の気持ちをよく分かってもらえる，充実感を体験する，認められるといった体験が心のエネルギーの源となる（中略）教員が『安心感を与える』『楽しさや充実感を感じさせる』『よく認め，ほめる』ことを通して児童生徒の心のエネルギーを充足することが，指導を根付かせるために必要である。」（文部科学省 生徒指導提要 第５章「児童生徒の問題行動の心理環境的背景にあるもの②」より抜粋）

一方，「不登校兆候の見逃し経験について」（図14）では，不登校対応経験がある教職員のうち49.3％が見逃したことがあると答えている。また，見逃したことがあると答えた教職員のうち不登校の兆候を見逃したことで欠席日数が増えたり対応が難しくなったりしたことがあると回答した割合は75.1％だった。見逃したかもしれない不登校兆候に関する自由記述を見ると，遅刻や欠席の状況だけでなく児童生徒の様子（表情や行動など）や友人との関わり方などを挙げている。

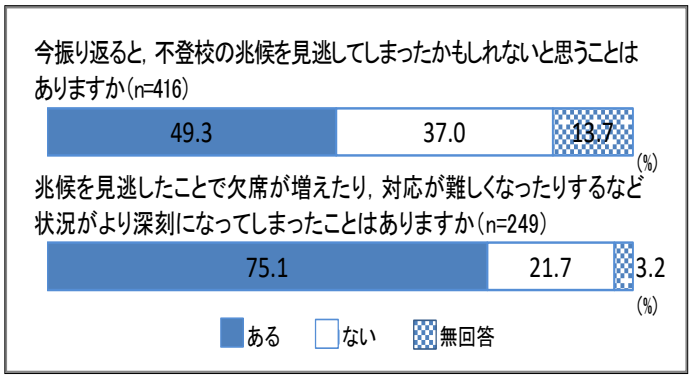


図14　不登校兆候の見逃し経験について

この自由記述の内容から，教職員が児童生徒の様子の変化に気付くことができず，適切なタイミングで支援することができなかった場合があるのではないかと考える。

不登校の兆候を見逃さず的確な支援を行うためには，「不登校はどの児童生徒にも起こり得る」という視点を持ち，児童生徒の様子に注意を払うことや，一人一人の児童生徒を日頃から複数の目で見守ることが重要である。同様に，不登校の兆候が見られた場合は，すぐに情報を共有し，チーム会議や家庭訪問などを行う体制が構築できていることも重要である。現在，多くの教職員が行っている初期対応が，個人による判断で行われているものだとすれば，それをチームとして行えるような体制を整えることで，不登校の兆候が見られた場合に，より迅速な対応を行うことができるようになるのではないかと考える。

なお，初期対応の段階で最も注意すべきなのは，いじめが原因になっている可能性がある場合である。この場合は，重大事態に発展する恐れがあるため，平成29年３月に文部科学省が示している「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」に沿った対応を早急に行う必要がある。

(3) 家庭との連携について

「担任が行った有効な支援策について」（図15）では，家庭訪問や保護者との面談や電話連絡などが上位を占めていた。

一方で，行き詰まりに関する自由記述では，保護者との関わりに関する記述が多く見られた。

また，逆効果だった支援に関する自由記述では，本人の様子を気にせずに登校を促すような声掛けをしてしまったというものや，児童生徒または保護者が求めている以上の働き掛けをしてしまったというものが挙げられていた。学校側からの働き掛けが不登校児童生徒にプレッシャーを与えたり保護者との関係づくりを停滞させたりしてしまっていることが考えられる。

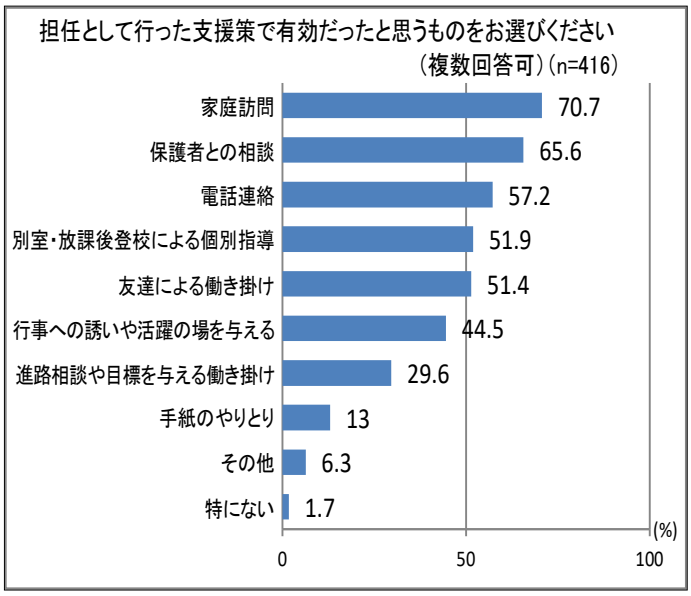


図15　担任が行った有効な支援策について

１．１で示したように，保護者から協力を得ることは児童生徒の支援を行う上で極めて重要である。特に，教職員が本人と会えない状況の場合は，保護者を介して支援を行うことになる。常に本人と生活を共にする保護者は，不登校児童生徒への支援を行う上での大きな役割を担っている。立場が違う教職員と保護者がそれぞれに持つ考え方や思いを一致させるためにも，教職員が保護者の心情を理解し，信頼関係を築いた上で，チーム会議で決めた支援の内容や方向性を共有する必要があると考える。

## ６．３　「不登校対応パッケージ」について

### ６．３．１　「不登校対応パッケージ」の開発に当たって

(1) チーム支援の組織について

２．２で示したように，チーム支援を行う上では，不登校児童生徒の支援を担任が一人で行うのではなく，複数で行うことが重要であり，そのためには対応の流れや組織などがあらかじめ決められていることが重要である。チーム支援の中心となる不登校対策担当者が，児童生徒に直接的に関わる教職員のチームから報告を受け，管理職を中心とするチームに報告し，不登校対策委員会の場を設定するなど，校内の不登校に対するチーム支援をコーディネートして，各チームが有機的な関わりを持つことができるような組織を構成することが望ましい。

本研究では，チーム支援を行う際の組織として，図16のような例を提案する。これはあくまでも一例であり校内事情に応じて，直接支援チームにスクールカウンセラーが加わるなど，メンバーや役割を流動的に変更しながらチームを組織するものとする。

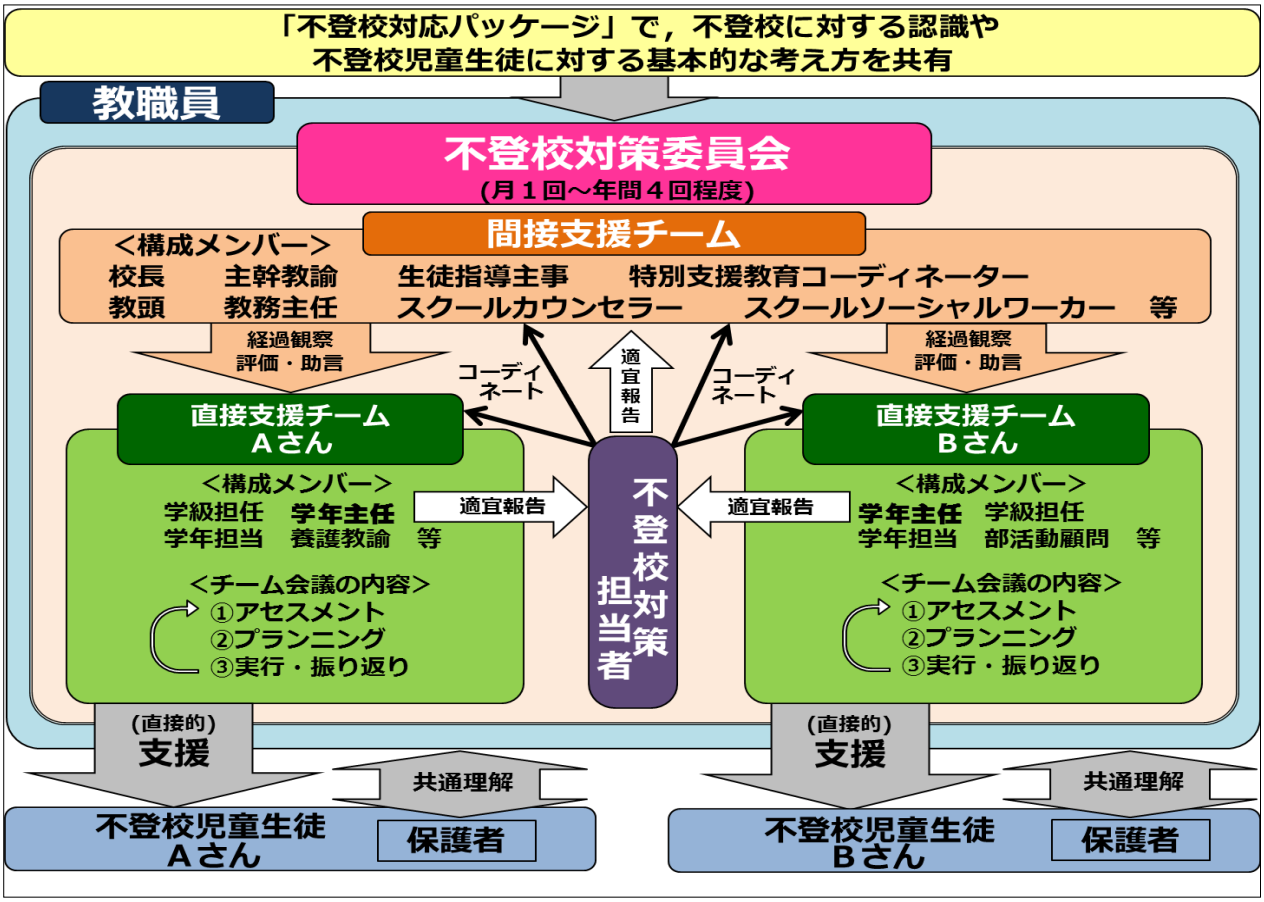



図16　本研究におけるチーム支援の組織の例

また，できるだけ早く支援を始めるためには，決められているメンバーがそろわない場合であっても，そのとき参加できるメンバーのみでチーム会議を開始することが重要である。

チームで支援を行うことの良さは，より多くの目で児童生徒の様子を捉えることができる点である。複数の目で見るからこそ児童生徒の小さな変容を早期発見することができ，初期対応につながる可能性が高まると考える。他にも，支援の方法について多くの発想を持つことができる点や担任一人では気付かないことを別の教職員が気付き，指摘する機会がある点，ラポールをうまく築くことができていない児童生徒に対して他の教職員からも協力を得られる点など，利点は多数考えられる。

各学校で組織的に支援を行えるようになることは，不登校児童生徒や保護者の心境や行動の望ましい変容につながるだけでなく，児童生徒を直接的に支援する教職員にとっても心強いものになるのではないかと考える。

(2) 「不登校対応パッケージ」開発における重点について

実態調査の結果を踏まえ，以下の３点を「不登校対応パッケージ」開発における重点とする。

１点目は，アセスメントとプランニングを強化した点である。実態調査の結果から，アセスメントとプランニングが実行されれば，より効果的な支援につながるのではないかと考えた。そこで，アセスメントとして，児童生徒の状況について情報を出し合い，本人が困っていることに焦点を当て，その背景や要因を見立てるだけでなく，不登校児童生徒一人一人の心情を推し量り，何が本人の強みや心のエネルギーになるのかを見いだしながら，それを踏まえた最善のプランニングを行うことができるような内容にした。

２点目は，不登校対応のためのチーム会議を実際に行うことができるようにした点である。各学校にいる不登校児童生徒について，手順に沿ってチーム会議を進めることで，確実に支援に結び付くようにした。

３点目は，不登校対応で行き詰まった際に参考にできるものにした点である。児童生徒の状況によって，どのような支援が必要なのか，「不登校対応パッケージ」のどのツールを参考にすればよいかを示した。また，対応ヒント集として，効果的な支援のヒントを示した。

この３点を踏まえ，「不登校対応パッケージ」の活用を通して，各学校におけるチーム支援が充実していくことを目指している。それにより，担任をはじめとする教職員と保護者が不登校児童生徒一人一人に寄り添った支援を行えるようになり，不登校児童生徒の望ましい変容に結び付けたいと考える。

(3) 「不登校対応パッケージ」の構成と概要について

本パッケージは，教職員が不登校に対する認識を共有し，チーム支援をより充実させることで効果的な支援につなげるために使用する研修ツールである。図17は不登校対応パッケージの構成図である。不登校対応の流れと，どの段階でどの研修ツールを参考にすればよいか，そして，それに該当する児童生徒の状況も示している。チーム支援を充実させるための「（A）研修用パッケージ」と，不登校対応で悩んだ際に参考にできる「（B）対応ヒント集」，職員会議等で不登校担当者が教職員に情報を伝えるための「（C）不登校対策委員会だより」で構成されている。

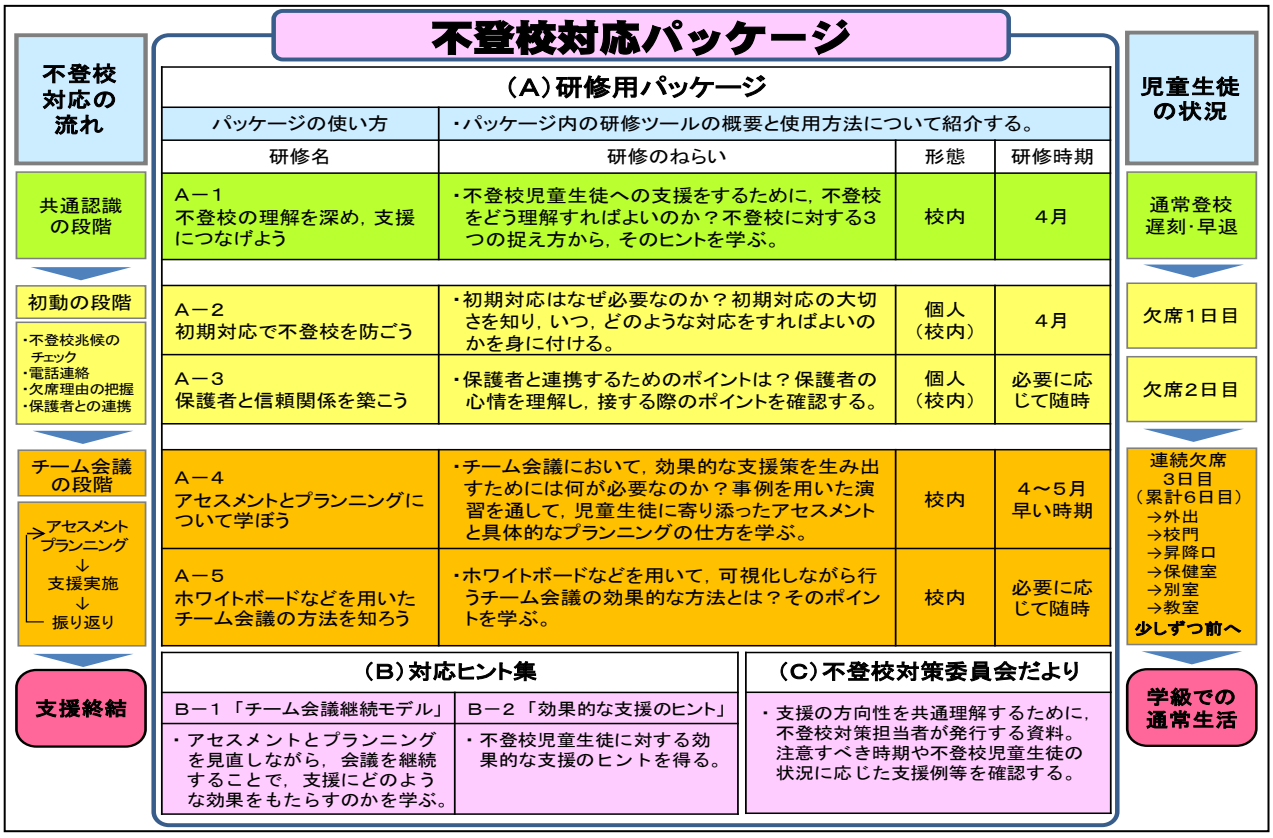



図17 「不登校対応パッケージ」構成図

(4) 「研修用パッケージ」の内容について

① A-１：「不登校の理解を深め，支援につなげよう」

不登校についての認識を深め，それを教職員間で共有し，実際の支援に結び付けるための研修ツールである。受講者がそれぞれの不登校対応の経験を振り返りながらシェアリングを通して不登校に対する認識を深め，共有することができる。不登校対応の際の重要な捉え方として「不登校の理解」を提案し，その内容についてロールプレイを行うことで「不登校の理解」の３つの捉えが実際の支援に生かされるよう工夫した（図18）。

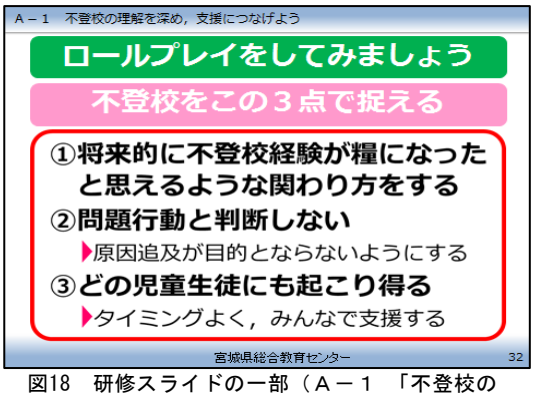
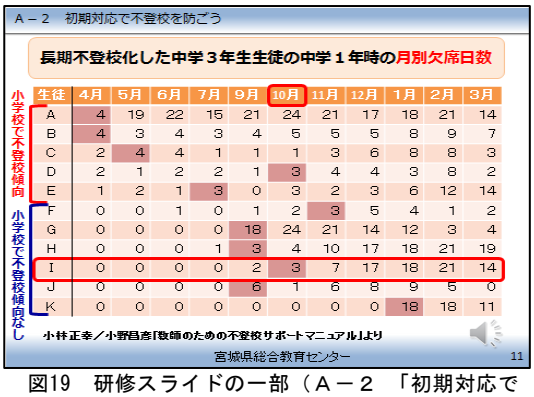



図18　研修スライドの一部（Ａ－１「不登校の理解を深め，支援につなげよう」より）

② A-２：「初期対応で不登校を防ごう」

初期対応の重要性や必要な考え方などについて学ぶための研修ツールである。実態調査の自由記述「見逃してしまった兆候」を示すことにより，児童生徒にどのような様子が見られた時に何をすべきなのかをより具体的に示した。また，どのような欠席状況が見られると不登校が長期化する傾向があるのかを示すデータや，欠席状況把握に力を注ぎ不登校出現率が減少した事例などを紹介することで，「決められているから行う」という対応ではなく，困っている児童生徒の苦しさを少しでも早く和らげたいという思いや，初期対応が不登校の長期化を防ぐことにつながるという視点を持って対応できるようにした（図19）。




| 生徒 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 4 | 19 | 22 | 15 | 21 | 24 | 21 | 17 | 18 | 21 | 14 |
| B | 4 | 3 | 4 | 3 | 4 | 5 | 5 | 5 | 8 | 9 | 7 |
| C | 2 | 4 | 4 | 1 | 1 | 1 | 3 | 6 | 8 | 8 | 3 |
| D | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | 3 | 4 | 4 | 3 | 8 | 2 |
| E | 1 | 2 | 1 | 3 | 0 | 3 | 2 | 3 | 6 | 12 | 14 |
| F | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 3 | 5 | 4 | 1 | 2 |
| G | 0 | 0 | 0 | 0 | 18 | 24 | 21 | 14 | 12 | 3 | 4 |
| H | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 4 | 10 | 17 | 18 | 21 | 19 |
| I | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 7 | 17 | 18 | 21 | 14 |
| J | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 1 | 6 | 8 | 9 | 5 | 0 |
| K | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 18 | 18 | 11 |

図19　研修スライドの一部（Ａ－２「初期対応で不登校を防ごう」より）

③ A-３：「保護者と信頼関係を築こう」

保護者と信頼関係を築き，連携して不登校児童生徒を支援するためのポイントをまとめた研修ツールである。保護者との面談の際に気を配るべきことや，保護者の様子に合わせた接し方のポイントなどを示した。声掛けの例を示すことで，実際の支援の場面で生かすことができるよう工夫した（図20）。

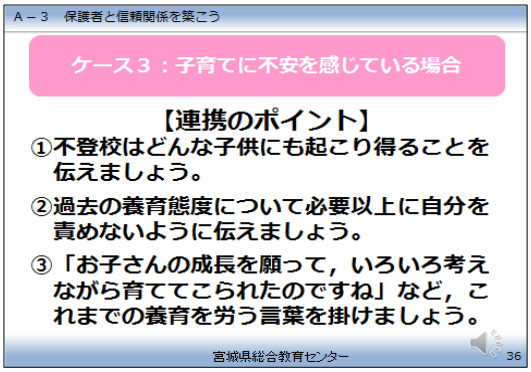



図20　研修スライドの一部（Ａ－３「保護者と信頼関係を築こう」より）

④ A-４：「アセスメントとプランニングについて学ぼう」

チーム会議におけるアセスメントとプランニングについてのポイントを詳しく学ぶための研修ツールである。研修を通して，アセスメントの際の方向性の違いがプランニングにどのような影響を与えるのかを実感できるようにした。それを基に，架空の事例について実際にアセスメントとプランニングを行ってみることで，アセスメントとプランニングのポイントについてより深められ，実際の支援に結び付くようにした。補助資料の「プランニング例」を参考にしながら支援策をイメージし，「支援策チェックリスト」で支援策が具体的で効果が期待できるものになっているかを確認できるようにした（図21）。

図21　研修スライドの一部（Ａ－４「アセスメントとプランニングについて学ぼう」より）

⑤　A－５：「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」

ホワイトボードなどを用い，可視化して行うチーム会議の方法について学ぶための研修ツールである。手順に従い，各学校の児童生徒の事例を基に会議の流れを体験することで，不登校児童生徒の研修後の支援に直接結び付くものにした。また，「ファシリテーター用進行マニュアル」「支援目標参考シート」などの補助資料を用意することで，チーム会議を迷うことなく実践でき，その後の支援に見通しを持てるよう工夫した。「チーム会議」に対して「難しそう」や「大変そう」などという印象を持つことのないよう手順を示しながら分かりやすく実践できるものにした（図22）。

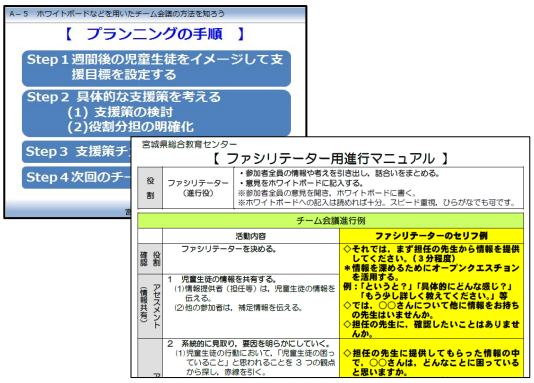



図22　研修スライドと補助資料の一部（Ａ－５「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」より）

(6)　「対応ヒント集」について

①　Ｂ－１：「チーム会議継続モデル」

アセスメントとプランニングを見直しながら，継続してチーム会議を行うことで，支援にどのような効果をもたらすのかを学ぶための研修ツールである。チーム会議の全体像をイメージしたい場合や，チーム会議による支援が行き詰まった場合にヒントにできるようなチーム会議例を示した（図23）。

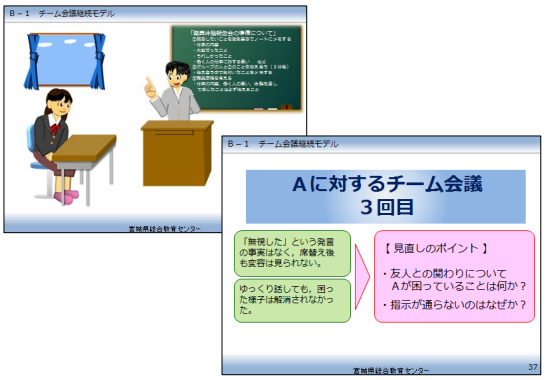



図23　研修スライドの一部（Ｂ－１「チーム会議継続モデル」より）

②　Ｂ－２：「効果的な支援のヒント」

不登校児童生徒に対する支援のヒントを得るための資料である。不登校対応で悩みがちな場面について，その場面で必要な「考え方」と「対応策」を具体的に示すことで，行き詰まりを感じた教職員にとっての悩みが少しでも解消され，これからの支援に対し前向きな気持ちを抱けるよう工夫した（図24）。

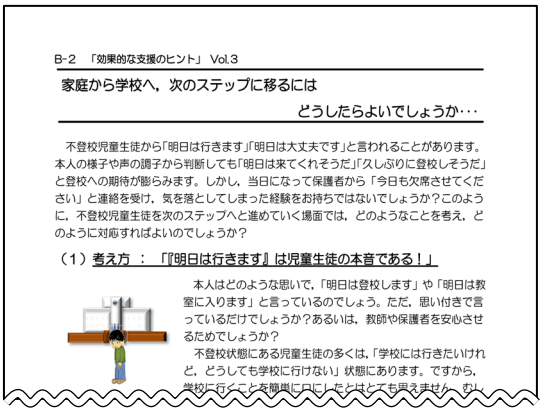



図24　Ｂ－２「効果的な支援のヒント Vol．３」の一部

(7)　Ｃ：「不登校対策委員会だより」

不登校児童生徒に対する支援の方向性を教職員間で共有するため，不登校対策担当者などが発行する職員会議資料である。４月には初期対応のポイントについて，７月には不登校のきっかけとなりやすい長期休業後の対応についてなど，注意すべき時期や児童生徒の状況に応じた支援策の例などを確認することができる。不登校児童生徒を生み出さないための取組を伝えられるものにした（図25）。

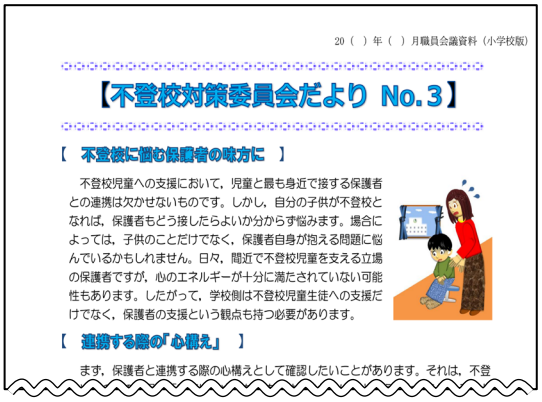



図25　Ｃ「不登校対策委員会だより No．３（小学校版）」の

## ６．３．２　「不登校対応パッケージ」を活用した研修の実践検証について

(1)　実践検証の概要

「不登校対応パッケージ」の有効性を検証するため，研究員所属校にて校内研修を実施した（表１）。ファシリテーターには事前に研修ツールを見てもらい，校内の実態や研修時間に合わせて自校化した上で研修を進めてもらった。また，研修後，受講者にはアンケート調査を，ファシリテーターには研修に関する聞き取り調査を行った。

表１　研究員所属校での校内研修の概要

| 実践日 | 学校名 | 受講者 | ファシリテーター | 研修の内容 |
|---|---|---|---|---|
| 10月10日(水) | 宮城県泉館山高等学校 | 24人 | 特別支援コーディネーター | 不登校の理解を深め，支援につなげよう<br>アセスメントとプランニングについて学ぼう |
| 10月30日(火) | 登米市立佐沼小学校 | 37人 | 不登校対策担当者 | アセスメントとプランニングについて学ぼう<br>ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう（全学年の実際の児童について各学年でチーム会議を実施） |
| 11月７日(水) | 塩竈市立第二中学校 | 18人 | 不登校対策担当者 | 不登校の理解を深め，支援につなげよう<br>アセスメントとプランニングについて学ぼう |

受講者アンケートの調査結果と研修中の記録は，図26から図32，及び表２から表６のとおりである。なお，調査項目ごとに回答人数が異なっているところがあるが，これは，それぞれの学校で研修を実施する度に調査内容を精査したためである。

(2) 実践検証の考察

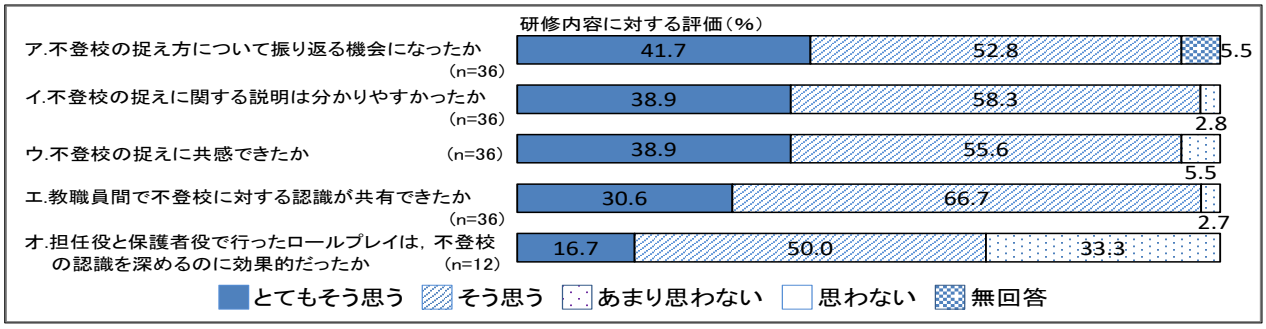



図26　「不登校の理解を深め，支援につなげよう」に関するアンケートの結果

表２　「不登校の理解を深め，支援につなげよう」に関するアンケートの自由記述（泉館山高校，塩竈二中のみ実施）

| |
|---|
| イ.に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○パワーポイントの説明，事例，分析が分かりやすかった。（中学校，高等学校）<br>○不登校５年後の実感や，不登校の原因などの実際の調査データに納得した。（高等学校）<br>△「このような見方もある」という伝え方の方が伝わりやすいと思った。（高等学校） |
| ウ.に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○関わる生徒と前向きにコミュニケーションすることで不登校予防になると思った。（高等学校）<br>○研修以前から不登校生徒への関わりを今回示されたような捉えに変え，生徒の表情や行動に良い変化が見られたのを実感しており「これでよかったんだ」と改めて思った。（中学校）<br>○不登校をこう捉えれば教員もプレッシャーを感じることが少なくなると思う。（高等学校）<br>△不登校にプラスの意味を持たせることは共感できるが，保護者や本人はやはり「できればあってほしくない」と思っていると思う。不登校にプラスのイメージを持ったまま保護者や生徒と接した時誤解を与えないような配慮は必要だと思った。（高等学校）<br>△保護者にもそう考えてもらう必要があると感じた。しかし，それを言うのは投げ出しているような気もする。（中学校，高等学校） |
| エ.に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○不登校問題について一緒に考える良い機会になったと思う。（中学校，高等学校）<br>○研修を通して捉えだけでなく保護者対応についてもみんなで考えることができた。（中学校）<br>△不登校を否定的に捉えている方が多い中で，周囲の対応次第で肯定的に捉えられるようになるものかどうかはよく分からない。（高等学校） |
| オ.に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点）※塩竈二中のみ実施 |
| ○保護者役としてロールプレイを行い，保護者の不安や悩みを実感することができた。（中学校）<br>○ロールプレイだけでなく感想のシェアリングもすることで，それぞれの受け止め方や考え方の違いに気付くことができた。（中学校）<br>△示された不登校の捉え方をどのようにロールプレイに生かして話せばよいか困った。（中学校）<br>△不登校の捉えを知っても，保護者にどう対応すればよいかは正直分からなかった。（中学校） |

① 「不登校の理解を深め，支援につなげよう」について

項目ア，エの結果から，この研修が，不登校の捉え方について各自で振り返ったり，不登校に対する認識を教職員間で共有したりすることに一定の効果があると分かった。また，項目イ，ウの結果からは「不登校の理解」について，説明が分かりやすく内容も概ね共感できるものだったと感じている教職員が多いことが分かった。これらの結果から，この研修を実施し，教職員間で「不登校の理解」を共有することができれば，その後のチーム会議，更には支援実施の場面においても方向性を一致させながら効果的な支援策を講じることができるものと考える。

一方，項目オの結果から，研修中のロールプレイの設定に課題があると考えた。ロールプレイは担任と保護者が会話するという設定で２回行った。１回目は，担任が原因を追及するために保護者に質問を重ねることで，無意識に保護者を責めることにつながるのだと感じてもらうことをねらいとした。また，そのように質問を重ねることで，保護者が不安感や不信感を持ち，連携がうまくいかなくなることも感じてもらおうと考えた。このロールプレイでは，受講者の様子や振り返りの発言などから，ねらいが十分に伝わったことが感じられた。２回目のロールプレイは「不登校の理解」を意識することで，１回目よりも保護者との関係が深まると実感してもらうことをねらいとした。しかし，会話が続かないペアが複数見られ「不登校の捉えを知っても，保護者にどのような声掛けをすればよいかは正直分からなかった」という自由記述もあった。また，受講者の様子からは，質問すること以外に保護者にどのように声を掛けてよいか分からないというような様子が見られた。これは，不登校児童生徒や保護者に対して寄り添った気持ちで接しようと思っていても，それを実際に言葉や行動に移すことは難しいということの表れであると考えられる。そこで，「不登校の理解」の３つの捉え方を基に，不登校児童生徒や保護者に寄り添った声掛けが行えるよう修正を加えた。

② 「アセスメントとプランニングについて学ぼう」について

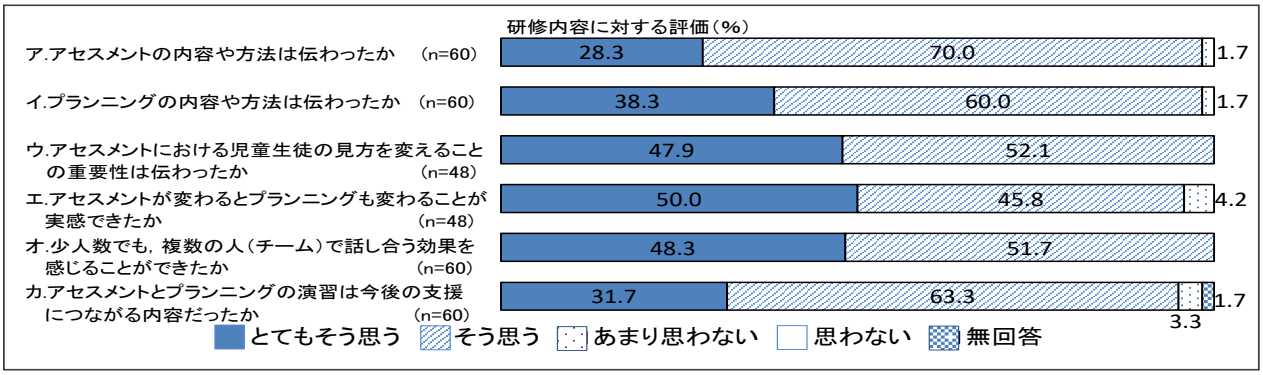



図27 「アセスメントとプランニングについて学ぼう」に関するアンケートの結果

表３ 「アセスメントとプランニングについて学ぼう」に関するアンケートの自由記述

| カ.に関する主な自由記述（○：良かった点 △：疑問点・改善点） |
|---|
| ○アセスメントをすることで，児童生徒への理解が深まると思う。（小学校，高等学校）<br>○「困っていること」と「強み」の両方を見ることは支援策を見付けるために有効だと思う。（小学校，中学校）<br>○プランニングだけでなく早期対応の面でも役割分担は大切だと思う。（高等学校）<br>○これまでは具体的な支援策を立てるところまでいかず，共通認識が図られないままそれぞれの目線で支援を進めることが多かったので，研修で学んだことを今後活用したい。（中学校）<br>△「強み」を探す際，事実のどれに目をつけるべきか迷った。どれも強みになり得るということで良いのだろうか？（高等学校） |

項目ア，イの結果から，アセスメントとプランニングの概要やアセスメントの際に児童生徒をどのように見立てればよいのかが理解できたと感じた教職員が多くいることが分かった。また，項目ウ，エの結果から，アセスメントとプランニングの関連性が感じられる研修であったことが分かった。項目オ，カの結果からは，チームで話し合うことの有効性を感じたり，今後の不登校

児童生徒への支援につながりそうだと感じたりした教職員が多くいることが分かった。しかし，自由記述を見るとアセスメントやプランニングの内容や方法について疑問を抱いた受講者がいたことが分かった。研修中にも，アセスメントとプランニングの演習で受講者が戸惑っている様子が見られ，補足説明が必要な場面があった。そこで，アセスメントに関しては，児童生徒を見立てる際に重要な考え方を一つ一つ確認しながら進められるよう修正した。また，プランニングに関しても，考えた支援策をより具体的にするための手順を一つ一つ確認しながら行えるようにした。さらに，計画した支援策が実行可能なものになっているかどうかをチェックするための「支援策チェックリスト」や「プランニング例」を作成した。

図28　宮城県泉館山高等学校における研修の様子

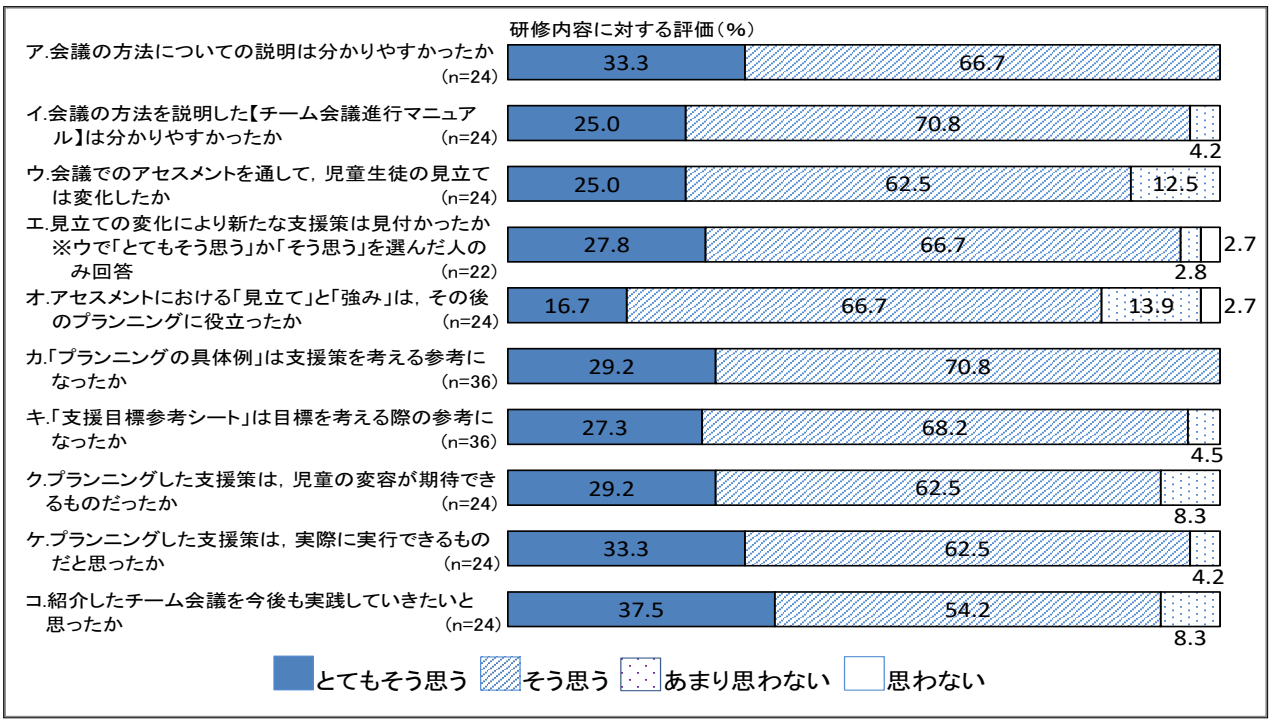



図29　「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」に関するアンケートの結果

表４　「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」に関するアンケートの自由記述（佐沼小学校のみ実施）

| |
|---|
| ア．に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○言葉だけでなくスライドを見ながら手順を受けられたので分かりやすかった。（小学校）<br>○児童の様子を時系列で見直すことができ，問題点を見付けやすかった。（小学校）<br>△説明が早すぎて理解が追い付かなかった。（小学校） |
| イ．に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○進行する際に使うファシリテーターの台詞例が示してあり分かりやすかった。（小学校）<br>○活動内容が項目毎に書いてあり分かりやすかった。（小学校）<br>△資料を読み込む時間が欲しかった。（小学校） |
| オ．に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○「見立て」や「強み」を考えることで児童の困っていることや良さを再確認できた。（小学校）<br>○アセスメントしたことをプランニングに生かすことができた。（小学校） |
| コ．に関する主な自由記述（○：良かった点　△：疑問点・改善点） |
| ○担任だけで不登校児童に対応するのは大変だったが，会議を通して他の先生方の意見や考えを聞くことができ大変良かった。今後繰り返しながら実践していきたい。（小学校） |

○可視化したことで情報や考えが整理され，短時間で具体的な話合いができた。（小学校）
○可視化することで児童の「困っていること」が見え，学校に来られない児童の思いを原点から考えることができた。新たな支援策を発見することもできたので早速実践してみたい。（小学校）
○研修の中で，実際の児童に対するチーム会議ができるのは有意義だと思った。（小学校）
△実践はしたいが，前段階として家庭との連携が必要だと思う。（小学校）

③　「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」について

項目アの結果からは，チーム会議の流れが理解しやすかったと感じた教職員が多かったことが分かった。また，項目ウ，オの結果からは，「見立て」や「強み」を重視したアセスメントとそれを基にしたプランニングが支援策を生み出すために有効であると感じた教職員が多かったことが分かった。さらに，項目イ，カ，キの結果から，用意した資料が会議を進める際に役立つものであると感じられた教職員が多かったことが分かった。しかし，自由記述では，読み込むための時間が欲しかったという内容があったことや，研修後の意見として，より様々なケースに対応するプランニング例がほしいという内容があったことから，補助資料を事前に配布することにしたり，より演習や実践に役立てられるようなプランニング例に修正したりした。

図30　登米市立佐沼小学校における研修の様子

項目ク，ケ，コの結果からは，アセスメントとプランニングを重視したチーム会議が，不登校対応に有効だと感じた教職員が多かったことが分かった。特に，話合いの内容を可視化することは，情報の整理や互いの考えを共有し，支援の方向性を一致させながら支援策を見いだすために有効であると実感した受講者が多かった。

④　「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」を用いたチーム会議について

佐沼小学校では，各学年に実際に在籍する不登校児童生徒についてのチーム会議を全学年で行った。終了後のシェアリングでは，不登校児童生徒の担任をしている教職員から「ホワイトボードでプランニングを可視化したことで，児童に対してこれからすべき具体的な支援の内容が明確になった」「学校として何をすべきか悩むことが多かったが，児童本人の居場所作りにつながる手立てがあることが分かり，励みになった」「一人の児童についてチーム会議を行っているうちに他の生徒の顔も浮かんできて，ここで考えた支援を別な児童にも実践したいと思った」などという感想が挙げられた。自由記述では，「可視化することで児童本人の困っていることが目に見え，学校に来られない児童の思いを原点から考えることができた。新たな支援策を発見することもできたので早速実践してみたい」などという意見が見られた。

このことから，可視化しながらチーム会議を行うことの有効性と共に，複数で話し合いながらチーム会議を行うことで，アセスメントとプランニングの発想が広がり，さらに，それらの質を高めることもできるため，効果が期待できる新たな支援策を生み出すことにつながると実感できていることが読み取れた。

このように，「Ａ－５　ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」の研修ツールが，各学校の不登校児童生徒や不登校の傾向が見られる児童生徒に対しての直接的な支援に結び付くことが確認できた。さらに，佐沼小学校では，研修の数日後，チーム会議で決められたプランニングが実践された学年や，引き続きチーム会議が行われた学年があった。支援の実践が児童の変容につながるまでには時間が必要だと思われるが，「ホワイトボードを用いたチーム会議の方法を知ろう」での研修が，その後の継続的な支援にも結び付く可能性があることを見いだせたのは，大きな成果だと考える。

⑤　研修形態，研修の意義について

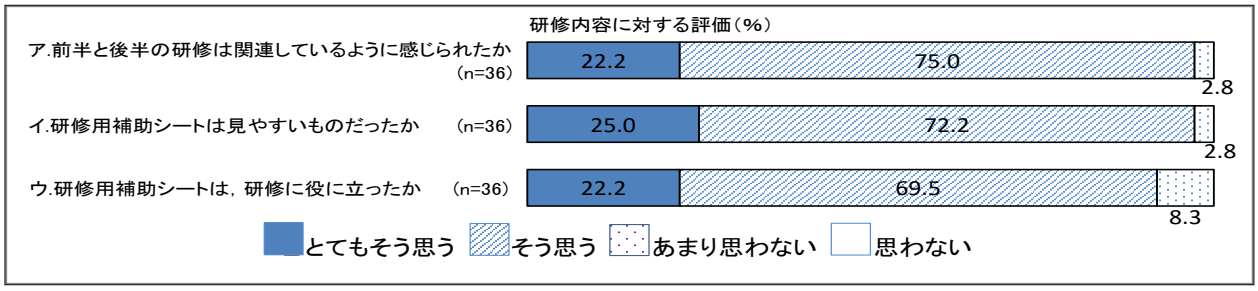



図31　研修形態，研修の意義に関するアンケートの結果

表５　研修形態，研修の意義に関するアンケートの自由記述

| エ.今回の研修を通じて，感じたことや気付いたことがありましたらご記入ください。（主な記述） |
|---|
| 【研修形態に関するもの　○：良かった点　△：疑問点・改善点】<br>○一方通行でない，演習型の研修としてこの形式は参考になった。（小学校，中学校，高等学校）<br>○ホワイトボードを見て回って，様々な見方・考え方をシェアリングしたことがよかった。（小学校，高等学校）<br>○不登校の捉え方によりアセスメントとプランニングの内容が変わることが分かった。（中学校）<br>△もう少し時間があっても良かった。プリント等を見る時間がなかった。（小学校，高等学校）<br>△２つの研修に同じようなところがあった。研修時間も超過してしまったので，その部分を省いてもよいのではないかと思う。（小学校）<br>【研修の意義について　○：良かった点　△：疑問点・改善点】<br>○生徒の小さな変化を見逃さず初期対応をしっかり行うためには，普段の意思疎通や何気ない接し方も大事だと思った。（高等学校）<br>○捉え方ひとつでその後の支援も変わってくると思った。実際の事例についてもプランニングまで話し合いたいと思った。（中学校）<br>○実際の対応でも複数の教員で話すことで，担任だけの偏った対応は防げると思う。（高等学校）<br>○少人数で話し合う方法を知り，ケース会議の時間が取れないときに有効だと思った。（中学校）<br>○チームで話し合うことで，担任としての悩みが軽減された。様々な見立てを基にすることで支援策を考えるための引き出しが増え，具体的な支援策を短時間で考えることができた。（小学校）<br>△学年だけでなく，学校全体で話し合う仕組みもないと対処療法で終わると思う。少人数は動きやすいが，専門的な情報や意見を求めたい時は人数の多い会議も必要だと感じた。（小学校）<br>△教員だけでなく，カウンセラーや外部機関との連携，保護者への伝え方などはどうしたらよいか教えてほしい。（高等学校） |

研修に対する自由記述からは，研修を通して不登校そのものや不登校児童生徒への見方が変わったり深まったりしたことや，チームで話し合うことで対応への負担感が減ったり支援の方向性を一致させながら支援策を見付けたりできることなどが読み取れた。研修形態については講義だけでなく演習を取り入れたこと，演習中に考えたことをシェアリングする活動を取り入れたことで，研修のねらいにより迫ることができたと読み取れる。一方，研修で示したチーム会議だけで不登校対応の全てを解決することは難しく，学校全体としての支援体制を構築する必要性を感じていることも分かった。また，２つの研修を同時に行う際，内容の重複が見られたことや研修時間に更に配慮する必要があることも分かった。これらの課題については，不登校対応に関する校内組織例を示すことや各研修ツールの内容の重複部分を見直すことなどで，より有意義な研修の実施を目指した。

図32　塩竈市立第二中学校における研修の様子

(3) ファシリテーターへの聞き取り調査

研修実施後，ファシリテーターに聞き取り調査を行った。研修内容や流れについては「スライドが分かりやすく，自校化できる点が良かった」「スライドと読み原稿の両方があるので進めやすかった」などという意見があった。しかし，「読み原稿の量を少なくした方が良い」や「強調すべき言葉を分かりやすくしてほしい」「アセスメントやプランニングの言葉の意味や考え方，実践方法に関する説明をより丁寧にし，受講者が迷わずに活動できるようにすべき」などの指摘を受けた。そこで，スライドと読み原稿を再度精選したり，受講者への指示も細かく設定したりすることで，円滑に研修が進められるようにした。

(4) 考察のまとめ

実践検証で明らかになった課題は以下の通りである（表６）。不登校児童生徒への効果的な支援につながる研修にするため，これらの課題を改善した。

表６　実践検証で明らかになった課題と改善点

| 研修名 | 課題 | 改善点 |
|---|---|---|
| 不登校の理解を深め，支援につなげよう | ・「不登校の理解」に対する認識を深めるためのロールプレイが機能を十分に果たしていなかった。 | ・役ごとの台詞や指示を修正し「不登校の理解」を踏まえ，どのように保護者に対して会話を行えばよいかを実感できる演習にした。 |
| アセスメントとプランニングについて学ぼう | ・アセスメントやプランニングの内容や方法について受講者が疑問を抱いた。<br>・アセスメントとプランニングの演習に受講者が戸惑っていた。 | ・アセスメントについては児童生徒を見立てる際に重要な考え方を，一つ一つ確認できるよう修正した。<br>・プランニングについては支援策をより具体的に考えるための手順を一つ一つ確認できるよう修正した。<br>・計画した支援策をチェックするためのリストやプランニング例を作成した。 |
| ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう | ・資料の内容が演習に役立つものになっていなかった。<br>・研修中，資料を確認する時間が確保できなかった。 | ・演習や実践に役立てられるようなプランニング例に修正した。<br>・補助資料を事前に配布してもらうようチーム会議用の冊子を作成した。 |

## ７　研究のまとめ

### ７．１　研究の成果

(1) 不登校に関する実態調査を行い，教職員の不登校に対する認識，チーム支援の現状，見逃しやすい不登校の兆候，逆効果だった支援，そして行き詰まりを感じる実際の場面などについて詳細に把握することができた。また，不登校対応の現状と行き詰まりの要因に基づき，効果的な支援を生み出すためのチーム支援の在り方を探ることができた。

(2) 実態調査の分析に基づき，チーム会議で効果的な支援を生み出すために，会議を実施するタイミングやアセスメントとプランニングの手順及び考え方について提案することができた。

(3) 「不登校の理解を深め，支援につなげよう」の実践検証では，不登校に対する見方が変わり，児童生徒の見えない思いを推し量ることが重要だと感じたという内容の発言が多く見られた。このことから，「不登校の理解を深め，支援につなげよう」を用いた研修が，不登校に対する認識を深めるために有効であると確認できた。また「不登校の理解」を教職員間で共有することが，チームとして支援を行う上で有効に働くことが分かった。

(4) 「アセスメントとプランニングについて学ぼう」の実践検証では，アンケート結果から，アセスメントで「困っていること」と「強み」を見いだし，それを支援策に生かすことが有効だと感じたという内容が見られた。このことから，「アセスメントとプランニングについて学ぼう」を

用いた研修が，アセスメントとプランニングの手順の理解だけでなく，効果的な支援策を生み出すことにもつながることが分かった。

(5) 「ホワイトボードなどを用いたチーム会議の方法を知ろう」の実践検証では，終了後の感想発表やアンケート結果から，ホワイトボードなどを使って可視化するチーム会議の方法が，情報や考えを共有し，支援の方向性を一致させるために有効であることが確認できた。

### ７．２　今後の課題

次年度以降の課題として以下の点について所属校で継続的に実践検証を行っていく。

(1) 「不登校対応パッケージ」を用いた研修が，その後の支援に影響を与えたかどうかを調査する必要がある。事後アンケートなどを行い，教職員が不登校児童生徒や保護者と接する際の気持ちや声掛けの内容に変化が見られたかなどを調査・分析することで，「不登校対応パッケージ」の有効性を検証する必要がある。

(2) 「不登校対応パッケージ」を用いた研修が，実際のチーム支援に結び付いたかどうかの確認が必要である。チーム会議の早期実施や継続につながっているか，チームとして連携して支援できているかなどを客観的に調査し，よりよい実践に向けた検討が必要である。

(3) (1)(2)を踏まえ，「不登校対応パッケージ」を用いた研修を実践することで，児童生徒と保護者の心境や行動に望ましい変容が見られるかの検証が必要である。変容が見られた場合，変容に至った重要な要素は何かを分析し，その要素をその後の支援に生かすことが重要である。

主な参考文献　　「＊」は Web 上の資料


［１］　文部科学省：「平成29年度『児童生徒の問題行動･不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果』について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/__icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_1.pdf　＊2018
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/__icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_2.pdf　＊2018

［２］　宮城県教育委員会:「平成29年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』（宮城県分）の結果について」
https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/708498.pdf　＊2018

［３］　宮城県教育委員会:「平成28年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小中学校）の結果について」　＊2018
https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/655653.pdf

［４］　文部科学省：「生徒指導提要」　教育図書　2010

［５］　宮城県教育委員会:「不登校への対応の在り方について」
https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/237122.pdf　＊2013

［６］　文部科学省：「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/108/houkoku/1374848.htm　＊2016

［７］　宮城県教育委員会：「学校教育の方針と重点」　宮城県教育委員会　＊2018

［８］　文部科学省：「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1375981.htm　＊2016

［９］　生徒指導・進路指導研究センター：「PDCA×3＝不登校・いじめの未然防止－点検・見直しの繰り返しで，全ての児童生徒に浸透する取組を－」　国立教育政策研究所　＊2017

［10］　宮城県教育研修センター：平成29年度　生徒指導・教育相談研究グループ研究報告書　2018

［11］　宮城県教育委員会：「不登校に関する実態調査 まとめ（概要版）」　宮城県教育委員会　2018

［12］　宮城県教育委員会：「不登校に関する実態調査 まとめ（詳細版）」　宮城県教育委員会　2018

［13］　花輪敏男：「児童生徒の不登校に関する学校の取り組み方や指導援助の進め方についての研究」　1990

［14］　近藤卓：「ＰＴＧ心的外傷後成長―トラウマを超えて―」　金子書房　2012

［15］　小林正幸，小野昌彦：「教師のための不登校サポートマニュアル」　明治図書　2005

［16］　生徒指導リーフ（Leaf22）「不登校の数を『継続数』と『新規数』とで考える」　文部科学省　2018

［17］　ちょんせいこ：「ちょんせいこのホワイトボード・ミーティング」　小学館　2016

［18］　黒沢幸子：「指導援助に役立つ スクールカウンセリング・ワークブック」　金子書房　2010

［19］　黒沢幸子：「ワークシートでブリーフセラピー」　ほんの森出版　2013

［20］　國分康孝，國分久子：「育てるカウンセリングによる教室課題対応全集６ 不登校」図書文化　2003

［21］　菅野純：「不登校 予防と支援Ｑ＆Ａ70」　明治図書　2014

［22］　教育と医学の会：「教育と医学 11月号」　慶應義塾大学出版会株式会社　2010